
転換の魔剣と抑止の聖剣

粕井菜緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転換の魔剣と抑止の聖剣

【Nコード】

N9099Y

【作者名】

狛井菜緒

【あらすじ】

父親の借金を、冒険者となって各地で働き、その金で借金を返済しきった没落貴族の娘ユーリット・ファベルは、久しぶりに家族から大至急帰って来いと呼び戻されて、家に帰る。しかし、彼女を待ち受けていたのは辛い現実だった。何故か嫁ぎ先は隣国で…相手は天敵だった。只でさえ苦労している女の子がさらに頑張る話です。

序幕（前書き）

誤字脱字があつたら教えてください

・世界観・

神々の祝福が根強く残る世界で、危険な魔物などが普通にいるため常に戦力が必要とされてます。

先祖代々受け継がれてきた血筋にまで神々の祝福が宿っており、祝福を持たないと言う人間はいません。

いるとしたら異世界人です

序幕

ママレカ公国の南西の港町・エレナダの冒険者ギルド《海の秘宝》には、今日もたくさん屈強な冒険者達が入り出るなか、掲示物の前に一際異彩を放つ少女が立っていた。

年の頃は16か17ぐらいだろうか。白い髪を藍色の紐リボンで結い上げ、華奢で小さな身体を騎士の洋装と星銀製の甲冑で包んみ、腰には容姿とは真逆の黒い剣を帯びている。

清んだ董色の瞳と雪のように白い髪と肌が一際美しく魅せており、さながら貴族の美少年に見える。が、身体の凹凸でかろうじて少女だとわかるぐらい、色気は乏しい。

その気品からして貴族の息女である事は間違いなく、なぜこんな荒くればかりいるギルドにいるのか疑問に持つ者も多いだろう。彼女の名前はユーリット・ファベル。

ここ《海の秘宝》屈指の高位の冒険者で、現在受けていた依頼を終え、次の依頼を受けるため掲示板に貼られた掲示物を見上げていたが、一枚の依頼書の内容を読んでユーリットは眉間に皺を寄せた。

《魔法騎士ユーリット・ファベル殿。大至急、家に帰還されたし。

ロベルト・ファベル》

「…兄上…。」

いつも父が再三に渡り帰還の依頼書を、ウザイほどギルドに送っていたのだが、今回は一番上の兄の依頼にユーリットは首を傾げた。

あの穏健な兄が何故ギルドに帰還の依頼書を出したのか…ますます気になる。

もしや病弱な母に何かあったのだろうか…。ユーリットは五年前の出来事を思い出し、胸に苦い気持ち広がった。

5年前、マムレカ公国のファベル伯爵家は借金で首が回らない状態に追い込まれていた。

ユーリットの父、ユリアス・ファベルは事業に失敗し、家財の殆どを失った。

使用人も雇えず、領地は稀にみる不作で八方塞がり…このままでは終わりだと言うときに、心労が溜まったユーリットの母は倒れてしまったのだ。

医者にみせる金もなく、途方に暮れていたユリアスと兄二人を見ていたユーリットは、このままでは駄目だと、一大決心をして家を飛び出し冒険者ギルドの冒険者になった。

幸い、ユーリットは祖父から剣をみっちり教えられていたので、ギルド内でも等角を早くに現し、15歳で家の借金まで返してしま

った。

また、冒険者の仲間達からも色々な技術を教えられたせいか、野外戦闘や魔法まで習得し、今では《黒剣のユーリット》と恐れられるほどの実力者として成長している。

『しばらく、家に帰ってねーんだから、そろそろ帰ってもいいんじゃない？』

「……。」

腰に帯びた相棒の言葉にユーリットは、無然としたまま、依頼書を掲示板から剥ぎ取ると、カウンターへと向かう。

「あら、ようやく帰る気になったの？」

「…はい。母の容体が気になりますし」

「依頼は確かに受諾したわ。無期限の依頼だから、しばらくノンビリしてきなさいな。あんた最近働き詰めだから良い機会よ。」

「はい…」

ギルドマスターのエナに、複雑な表情を浮かべたまま一礼すると、ユーリットは外へと出る。

なんだかとてもなく嫌な予感がしたが、母が心配なので渋々なが

ら家へと向う準備をするため、宿へと向かった。

ユーリットの出っていく背中を見送ると、エナは依頼書を屑籠に丸めて放りこみ、苦い表情でユーリットが出ていった扉をみやる。

「はぁ…ごめんね。ユーリット」

エナはカウンターに肘をのせ、溜め息をこぼし、ぽつりと誰にも聞こえないように呟く。

ユーリットはエナに取っては可愛い妹分だった。

控え目で真面目な性格だったが、どんな小さな仕事も嫌な顔をせずを受けて、必死に働き、魔法騎士にまで登りつめた彼女を、ギルドのメンバー達は皆大切にしてきたが、今回ばかりは守りようがなかった。

エナは、冒険者の登記書類の棚からユーリットの登録書を取り出すと、思いっきり縦に裂いて、先程の依頼書と同様に屑籠へとそれを入れた。

序幕（後書き）

《騎士の家門》

戦闘能力の血の祝福では最高とされています。

この血の祝福を持つ人間は戦闘能力に特化しており、通常の人間の5倍の身体能力をもつ。（女子は訓練しないと発揮できません）

そのため軍人では将校に多い。

《術士の系譜》

魔力を強く宿した人間が持つ祝福。母から子に遺伝しやすいので血の祝福と同類扱いになっている。

《王権の王冠》

王家がもつ特殊な祝福。覇気や統率力をUPする。嘘が見抜け、状況判断や行動力などカリスマ性を持つ… e t c

などなど

一幕（前書き）

ユーリット・ファベル（17）

・身長157cm

・体重46（鎧抜きで）

・容姿

白髪に紫色の瞳で、少し猫っぽい

・血の祝福

《術士の系譜》と《騎士の家門》

・師の相伝

いろいろ

・資格称号

魔法騎士

・二つ名

《黒剣のユーリット》

備考

小さな頃から祖父に鍛え上げられたせいか超人離れした体力と身体能力を持つ。

素直で真面目な性格なので、ギルドのメンツから色々な技能を教えて貰い微最強。

物静かで争い事を嫌うが、容赦はしない。

一幕

ユーリットは魔法騎士と呼ばれる称号資格がある。

魔法騎士とはそのまんま魔法が使える騎士のことで、攻撃にも防御にも特化した称号資格であるが、なりたいたいと思ってなれるものではない。

魔法騎士になるためには二つの血の祝福が必要になる。血の祝福とは、神々から祝福された人間の家系で、産まれた時から資格を持つことを血の祝福と言う。

ユーリットの母のエリーゼは魔術師だったので《術士の系譜》と言う血の祝福がある。つまり、魔術師の血筋なため、ユーリットも魔術が使える。ユーリットの父、ユリアスも《騎士の家門》という武術が特化した祝福を持つ。

つまり両親の祝福を両方受け継いだので、ユーリットは魔法と剣術を得意とする騎士の称号を得ることが出来たのだ。

血の祝福はこの世界の人間が誰でも持つが、《騎士の家門》や《王権の王冠》などの祝福は数はあまり多くはない。

血の祝福とは逆に、師から弟子への技術の継承をすることで、資格を得られる事ができる。これを師の相伝と言い、こちらは血の祝福とは違って数多く存在する。

ファベル家は代々《騎士の家門》の血統で、歴戦の勇士が多くユーリットの祖父エドワードは將軍職についた程の傑物だった。

父は軍職にあるものの完全な裏方で、軍部の補給物質の運搬を指揮している。

兄達もみな騎士団に就職したが、まだまだ新人なので下っぱ騎士とあったところだ。

多分、純粹な武術の腕ならユーリットの方がはるかに強いのだが、五年間家に帰っていないユーリットはそれを知らない。

ママレカ公国の南西の港町エレナダを出発して三日後、ユーリットは故郷のバーデンファベルに到着した。

屋敷はバーデンファベルの街の北側にあるため、街の外壁の南門から入らなければならない。

ユーリットは南門を通過すると、フードで目立つ頭部を隠し、慣れ親しんだ中央通りを馬の手綱を引きながら、ゆっくりと歩く。

五年も経つと街の様子もだいぶんかわり、以前より賑やかな活気を取り戻したバーデンファベルの街を見ながら、ユーリットは微かに口元を緩めた。

『ユーリット、ここがお前の故郷か？』

「…うん。ヴァルは初めてだっけ」

『お前と出会った魔謀の森は反対方向だかな。お前の仕事は殆ど

南と西側が多かったし……こっちはあんま来てねえな』

黒剣の相棒に「そう」と返すと、ユーリットは街の北の高台にある屋敷に視線を向ける

バーデンファベル北館。ファベル家に代々受け継がれてきた歴史あるその屋敷は、街を見下ろす様に建てられていた。

『ボロいな』

「うん、ボロいね」

正直な感想を言う、相棒にユーリットは苦笑した。

数々の依頼をこなし、父がこさえた借金を全て返しきった彼女からすれば、ボロい館を見ると辛い返済をした五年間の出来事を思い出すのだろうか、ユーリットの声は微かに震え、瞳は潤んでいる。

ただひとつ守りきったボロい館が、やけに小さく見えてユーリットは、涙をそっと拭った。

「ユーリットおおお！」

扉を開くと、涙を垂れ流し、こちらに突進してきた父親を避けると、出迎えた懐かしい面々に挨拶をする。

「おかえりなさい。ユーリ」

「ただいま帰りました、母様」

「おかえりユーリ。」

「久しぶりだな」

「お久しぶりです、ロベルト兄上とルイス兄上」

ユーリットの顔にそっくりな母と、背が高くなった長兄のロベルトと、次兄のルイスにきちんと挨拶をする。

「ただいま父上。」

「ゆ、ユーリット…。」

ユーリットは、一応父に挨拶を言うと、フードがついた外套を脱ぐ。すると腰に帯びた漆黒の剣の姿が表れ、家族の視線はその剣へと向けられる。

「これが、噂の黒剣か。成る程確かに真っ黒だな。」

『…ユーリット、誰だこいつは』

「…っ!?!?」

「しゃ、喋った…?」

いきなり剣から若い男の声が聞こえ、二人の兄はギョツとして、ユーリットの腰の剣を仰視する。

母のエリーゼは魔術師なためかその剣の正体が分かったようで、立派に独り立ちした娘に寂しげな笑顔を向けると、そっと抱き寄せた。

「ユーリット、貴女…魔剣の主になったのね？」

「…はい」

「…「魔剣!?!?!」」

復活した父親と二人の兄がハモる中、当の本人はゲラゲラと笑い声をあげている。

『やっべーマジでハモったし、流石親子!間抜け面もそっくり!!!』

「…喋れると言うことは名のある魔剣とお見受け致します。私はユーリットの母、エリーゼと申します。よろしければお名前を伺っても?。」

『俺の主の母なら礼儀は無用だ。俺はヴァルフリート。転換のヴァルフリートだ。宜しくなおふくろさん』

「ユーリット…お前、《トルギストフの聖魔十剣》だと知ってて契約したのか？」

「ううん…森で拾ったら契約してくれって言われたから契約した。」

トルギストフの聖魔十剣とは、鍛冶の神と呼ばれた鍛冶師トルギストフ・ハーブエイが鍛えた十本の剣で、各々意思をもち、主を自ら選ぶという。

十本のうち五本は魔剣、もう半分は聖剣と呼ばれている。

聖剣と魔剣…どう違うかと言うと、剣に宿っている魂が違うのだ。聖剣は聖霊の魂がやどり、魔剣には太古の魔族の魂が宿っていると
言う。

一本ではあまりにも強力すぎるため、トルギストフは魔剣と聖剣を夫婦剣として互いに封じあえるように二本一對に造ったと言われているが、今では殆どはちりじりになり、何処にあるかも不明なためそれが真実かどうかは解らない。

まさか身内がその十本の中の一本の主になっているとは、露知らず、エリーゼ意外の三人は顔色を蒼白にさせていた。

「あれはあれか？…親父の呪いか何か？私の可愛いユーリットが魔剣の主とか、マジ泣きそう。私がちゃんとしてればユーリットは今頃立派なレディに…」

「いやいや父上、さすがに剣術馬鹿なお祖父様でも予想外だったと思うよ。てか、ユーリットは立派なレディだからね」

「…ルイス。父上の妄言に付き合うな。魔剣殿、私はロベルト・フアベル。ユーリットの一番上の兄です。以後お見知りおきを。」

「あ、俺は次兄のルイスです。よろしくね」

『おう、よろしく』

二人の挨拶に朗らかに返す陽気な魔剣に、二人は笑みを溢す。

控え目で大人しい性格の妹にはある意味ぴったりの剣かもしれない。魔剣なのにごとか人間臭くて、明るい性格は実に親しみやすかった。

「ユーリット、今日は疲れただろう。呼び戻した理由は明日説明するから、今日は自分の部屋で休むといい。魔剣殿も手狭な屋敷です。ごゆるりとしてください」

「はい。」

『ぶつちやけユーリットの腰にぶら下がってただけだから…疲れては居ないんだが…ありがたく休ませて貰うぜ』

現実に戻ってきた父親によやくまともな返事を返すと、ユーリットは一礼すると、自室へと向かった。部屋は綺麗に掃除されており、

五年間と変わらぬ模様にユーリットは安堵した。

父のユリアスは乙女趣味で、ユーリットにアマアマなレースやピンクのものを着せたがる。毎回ユーリットが嫌がるので諦めていたが、五年間部屋は無事だった様だ。模様替えさられていたら、迷わずエレナダに帰っていただろう。

ユーリットは甲冑を脱ぎ、騎士服のまま部屋の長椅子に横たわると瞼を閉じる。

「ヴァル、夕食になったら…起こして。」

『へいへい。』

「……絶対だよ?」

『へいへい』

いまいちやる気のかけた返事にユーリットは気にも止めずゆっくりと目を閉じた。

一幕（後書き）

父親の借金はおよそ日本円で3000万ぐらいです。

ですがギルドの仕事で高額なものを六回か七回うければ返せる額です。

ヒロインは11歳からギルドで働いてますので、小さな仕事から大きな仕事まで満遍なく五年間受けてたら借金は余裕で返せるんです。

この世界では多分冒険者が一番手っ取り早く稼げる仕事です

二幕（前書き）

・トルギストフの聖魔十剣

現在4本は消失、6本が現存している。

ヴァルフリートとユーリットの出会いは別の機会に出します

・ファベル家一覧・

祖父・エドワード

祖母・ブリジット

父・ユリアス

母・エリーゼ

長兄・ロベルト

次兄・ルイス

末娘・ユーリット

祖父のエドワードと祖母のブリジットは既に故人です

二幕

早朝4時、まだ朝日も昇らない暗い道を馬車がある一軒の館へとやってきた。

ロベルトはそれを待つていたかのように、手にランプを持ち、来訪した馬車を使用人と共に出迎える。

馬車は家の玄関先で停車すると、中から30代ぐらいの黒いドレスに身を包んだ女性が、馬車から降りてきた。

「お待ちしていましたマートック夫人。」

「ごきげんよう。ロベルト様。妹君が御帰還されたとお聞きし急いで王都を出たのですが、何分急だったためにこのような時間に到着とあいなりました。申しわけありません。」

「いえ…さぞお疲れでしょう。どうぞ中へ。暖かい紅茶をお入れしましょう。」

皆寝静まる早朝にやって来た客は、そつと屋敷を見上げると、ロベルトの後に続き、歩きはじめた。

「おはよう…ヴァル。」

『ふああ…もう朝か。おはようさん。』

ユーリットはベットから起き上がると、壁に立て掛けた相棒のヴァルフリートに朝の挨拶をする。

ベットから降りてクローゼットを開けると、母が揃えたのかシンプルで趣味の良いドレスが何着もあり、水色のドレスを選ぶと早速着替えることにした。

ちょうど支度を終えた頃、ドアのノック音が部屋に響き渡り、ユーリットは扉へと向かう。

最近雇い入れた使用人が朝食を伝えにでもやって来たのだろうか…？
扉をあけると、黒いドレスを着た知らない女性が立っており、ユーリットに膝をやや屈めて会釈した。

「…？」

「失礼いたします、私は王宮女官を拝命しておりますサリア・マートックと申します。」

「お会いできて光栄ですマートック夫人。私はユーリット・ファベルと申します。以後お見知りおきを」

王宮女官と言うことは、貴族の未亡人だ。ユーリットは冷静に会釈を返す。それをサリアは目を細めてジッと見つめると何か納得したのか、軽く頷いた。

というか、何故田舎街に、しかも我がボロいファベル家の屋敷に王宮の女官がいるのだろうか。しかもいきなり朝一番でユーリットの部屋に訪問したのは何の目的があつてのことなのか。ユーリットは内心、慌てたが、長年の経験上、対応は迅速に冷静に対処するのに慣れていたため咄嗟に挨拶出来たのは不幸中の幸いだらう。

しかし、ユーリットは未だに状況が理解できずにいた。

「あの？」

「失礼、想像したよりも華奢な方だったので…。不快になられたら申し訳ありません。よろしければ、食堂にご一緒いたしませんか」

「…はい。」

ユーリットは脳内でサリア＝父の客と認識するとサリアと共に部屋を出た。

「朝早くに不躰な訪問をお許し下さい。実はわたくし、公務でこちらに来たのですが、二、三貴女にどうしても伺わなければならない案件があり、こうして恥を忍んで朝食にお誘い致しました。申し訳ありません」

つまり、個人的に聴きたいと言う事は、ユーリットの家族の前では聴けないことだ。

現在この屋敷には三人の召し使えがいる。ユーリットが借金を返してから雇い入れた召し使い達は恐らく今頃は朝食の準備で厨房にいるだろうし、兄と父達は客を迎える準備で忙しいはずだ。

それを把握しているなら、この女官は頭が切れる人なのだろう。

人気がない朝の廊下を歩きながら聴くと言うことは、よほど急ぎの案件と言うことが。

「驚きましたが、不快には感じてはおりません。…私に聴きたいことは何でしょうか。」

「はい。ユーリット様は武術が得意とお聞きしましたが、他に女性貴族の嗜みは？」

女性貴族の嗜みと言うことは芸事だろう。ユーリットは昔から祖父との剣の稽古の他にも芸事を学んでいたが、絵画と音楽は壊滅的といっても良い。しいて言うなら

「…刺繍と、調香は得意です。ダンスも嫌いではありません」

「結構。ご様子からして、読書や詩作も不可ではなさそうですね。」

「ええ、まあ」

「…もうひとつ。貴女は処女ですか？」

その質問にユーリットも驚いたのかバツとサリアを見上げた。

「…。」

恥ずかしくなり目を反らして無言で頷けば、サリアは眼鏡を押し上げ、容赦なくユーリットを見下ろす。

「では、意中の男性もいらっしやらないんですね？」

「はい。と言うか…あのサリア様、何故そのような質問を？」

「それは朝食の時にご説明いたします。私がここにいる理由を、お父上から直接お聴きするほうが宜しいでしょう。それと数々の非礼な質問をした事をお詫びいたします。」

立ち止まり、頭を下げるサリアにユーリットは困った様子でそれを見下ろした。

（…ヴァルを連れてくれば良かった。）

喋り下手なユーリットは、気まずい空気に返す言葉が見つからず、とりあえずサリアを食堂へ促すことにした。

食堂につくと既に両親と兄たちが揃って二人を待っていた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おはよう。ユーリット」

食卓に並んだ朝食を見るとユーリットはサリアに上座を進めると、自分は下座の次兄の席へとつく。

全員が席に座ると、恒例の祈りをささげ、各々朝食に手をつけはじめる。

「…さて、ユーリット。聴きたい事が多々あると思うがまず、お前を呼んだわけを説明しよう。」

珍しく真面目な父にとユーリットは頷くと手を止めて、ユリアスに視線を向ける。

「…実は半年後の春月に第一公女、アリエル様が、隣国エリストナ王国のエルンスト皇太子の側妃として嫁ぐ事になった。」

ユーリットは表情には出さずに内心で首を傾げた。

ママレカ公国は小国だが、その公王家の血には間違いなく《王権の王冠》が流れている。

それを抜かしても一国の公女を皇太子妃ではなく、側妃に嫁がせるとはママレカ公国に喧嘩を売っているとは思えない。

「…恐らく何故、側妃なのかと思うだろう。しかし、これには深いわけがある。」

アリエル様の母君の第二妃のハミエラ様は元農民だとお前も知っているだろう？それをあちらの五大公が気に入くわないようなのだ。」

そう、現公王ロドニー二世の第二妃のハミエラは農民出身の妃なのは国内外でも知られていることだ。

しかし、ハミエラ妃が公妃になったのはその血に流れる祝福によるものだ。

ハミエラ妃の先祖は大地母神の神官で、《慈母の恩恵》を血に宿していた。《慈母の恩恵》とはその血の祝福をうけた人間が存在するだけで広範囲にかけて、豊穣の恵みをうけることができる特殊な血の祝福で、極めて少ないものだ。

実際、ハミエラ妃と公王が婚姻を結ぶと前年度に比べて作物の収穫量が二倍になり、ママレカ公国は豊作続きだ。

最初は極めて珍しい血筋なので、ロドニー王は保護しただけだったのだが、いつしかハミエラ妃と恋仲になり第二妃として迎えたのだという。

因みに第一公妃のエリザベス妃は、現公太子を産んだ後、まもなく亡くなっていたのでハミエラ妃は事実上後妻と言うことになる。

ハミエラ妃とロドニー二世は三人の娘と二人の息子に恵まれたが、全員《慈母の恩恵》持ちなため、年々、作物の収穫量がハミエラ妃とその子供達の相乗効果で凄いことになっており、北のクリエスト口帝国の食料危機を救ったのは有名な話だ。

他国からの縁談の申し入れが後を絶たないぐらいなのに、どうして国を担う五大公と呼ばれる公爵達が反対するのだろうか。

ハミエラ妃は確かに身分は低い、それにあまりある血の祝福を受けている。

その血を祝福をもつ姫を側妃にしるなどとは、普通は言えないだろう。

「実は、ちょうど五大公には各々年頃の姫君がいてね。熾烈な正妃争いの真っ只中だったのだが、ここにきてアリエル姫と言うダークホースが現れたせいで、五大公は焦ってうちの姫様に難癖をつけてきたわけだ。」

：つまり権力争い中に、自分達より地位の高いアリエル姫との縁談が決まったことに反発した権力者どもの我欲のせいで、自国の姫が側妃として嫁ぐ事になったのか。

ユーリットは内心、アリエル姫と、ハミエラ妃に同情した。

ママレカ公国は大陸の食料庫と呼ばれるほど自然豊かで、農耕が盛んな国だが、武力は極めて低い。

そのため、現在北側の隣国、クリエストロ帝国と東側のエリストナ王国という二つの大国の庇護下にあるおかげで存続できているのだ。発言権が低いため、そう難癖つけられると断れないから仕方がない。

さぞかし、心を痛めていることだろう。

しかしながら、アリエル姫の輿入れと、ユーリットを呼び寄せた理由との接点が見つからない。

「…既に五大公の姫君が先に側妃入りはしたが、さすがにエリストナ国王も我が国に不敬だと感じているようで、五大公との折り合いがつけば、アリエル姫を皇太子妃にするとエリストナ国王から直々に内約を頂いているから問題はないのだが、ここでお前を呼んだ訳が関係してくる。」

そついうとユリアスは、ちらりと王宮女官のサリアに目配せをする。

サリアも心得たと頷くとユーリットに向き直る。

「姫様が側妃となると、五大公の姫君が既に入られている後宮入室する事になりますが、後宮は男子禁制。そのためアリエル姫の護衛をできる人間は当然女性という事になります。」

ユーリットはようやくそこで納得した。

つまり、ユリアスやサリア達はユーリットにアリエル姫の護衛をさせるために呼び戻したのだ。

確かにユーリットは没落気味とは言え、貴族の娘だ。その上ギルドでも働くほど武術に長けている。

権力争いの真っ只中の後宮に入ると言うことは、命も狙われやすいと言うことだ。

普通の《騎士の家門》の祝福をもつ貴族でも女子が剣を持つことはまずないし、そう考えればユーリットは護衛に適役だった。

「…しかし、エリストナ王国の後宮にはある決まりがあります。」

「決まり…ですか？」

「はい。側妃の側近は女性であること。まあ、これは基本ですがここからが問題です。」

他国からの側妃のばあい、側妃付きの側近は三種類に分けられており、？エリストナ王国の貴族未婚女性　？未亡人　？エリストナ王国の貴族と婚姻関係をもつ者…と限られています」

つまり、エリストナ王国の後宮では皇太子がいつ誰に手を出すかわからないので、他国の側妃付きの側近は未婚の貴族女性であらねばならないと言うことだろう。

しかし、それが嫌なら、未亡人か、エリストナ王国の貴族男性と結婚した貴族女性を側近にしろと言うことになる。

エリストナの王族は未亡人と結婚することは許されていないし、死人の妻に手を出すことを国民性からして忌み嫌うので、エリストナ王国の貴族でなくとも未亡人なら他国出身でも側近はOKと言うことだ。

けれどエリストナ王国の貴族の未婚女性意外は、例えば他国の貴族の女性でも受け入れるつもりはないと名言している。

これは過去にエリストナ王国に嫁いできた王妃の側近が、国王の寵愛をうけたが、国王の寵愛が冷め王妃に寵愛をむけたがために、逆

上して国王に毒を盛ったことから、そう言う決まりになったのだ。

但し、例外としてエリストナ王国の貴族男性と結婚していれば話は別と言うことになる。

エリストナ王国貴族と結婚することで、夫がいるので、王族も下手な事はできない。つまり王族でも人妻と未亡人はNGなのだ。

エリストナ王国の未婚貴族女性が側近でも良いというのは、身内臍臍と考えてもいいだろう

所詮、他国の人間は彼らからすれば信用できないのだ。

「…つまり、父様とサリア様は…私にエリストナ王国の貴族に嫁げと?」

「…そう言うことだ。」

確かに17歳は一般的な貴族女性の結婚適齢期だが、ユーリットはつい最近までギルドで働いていたので、いきなり結婚しろと言われるのは正直抵抗があった。

他国にいきなり嫁げと言われて、はいそうですかと言うには頭が混乱していたのだ。

「…もし、それを拒むとどうなるのですか?」

「この屋敷が更地になって、家名がなくなっているでしょうね。」

これは完全な脅しであった。つまりこれは公王勅命である。

斜め前に座る母が、ユーリットを心配するような、酷く罪悪感になされるような表情を浮かべていた。

散々苦勞させてきた娘に、このような結婚を強制するなんて、あまりにも酷い仕打ちだと母親は泣きそうだ。

実際、ユーリットが家に帰ってくるまで夫と大喧嘩していたし、毎晩枕を濡らしていた。

しかし、愛娘が帰ってくるのに泣き顔を見せるのは良くないと必死で我慢していたが、とうとうエリーゼはポロポロと涙を溢しハンカチを目にあてる。

兄たちも同様、苦い表情をうかべ、父・ユリアスに至っては必死に拳を握りしめ何かを堪えていた。

そんな様子の家族をみて、ユーリットは目をふせると、軽く息を吸うとサリアに真っ直ぐな目を向けた。

「誠心誠意、姫様に忠心を捧げ、姫様をお守り通すと我が家門に誓います」

「…誓いを受諾します。では、具体的な今後の予定を組みましょ
うか。」

サリアはユーリットの言葉に満足そうに優雅に微笑むと、ナプキン
をその手に取った。

二幕（後書き）

サリア女史無双。

サラリと毒を出すタイプです。

次回に天敵の旦那がでます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9099y/>

転換の魔剣と抑止の聖剣

2011年11月27日10時02分発行